

## 生きるために

香北町出身 久保 大八郎

昭和21年5月28日

土佐山田駅の下りホームに浮浪姿の男が下車した。

戦斗帽に巻脚絆のくたびれた服装で雑嚢を肩に掛け、衆目を浴びながら、大柄行き接続バスへ足早に向かう。

バスは既に満員で、先客の背を押し尻を突き上げて、やっとステップに足を掛け、左足をも上げようとしたりその刹那、突然後ろから強い力で引き下ろされた。

啞然となった男を押し退けて、凄く素早さでステップに飛び乗ったのは中年の婦人であった。

引っ張られて緩んだ雑嚢の紐を締めなおしながら、発車するバスを気抜けして見送る男は私であった。

土佐山田駅での女性と鹿兒島港の売店の女将の顔は、私の心に深く食い込んで記憶を新たなものにしてくれる。

それから五十年過ぎた・・・

戦後の社会は、土佐山田駅の女性にその行動を強いた。世相は否応なしに、社会の傾斜に向かって流れていく。

私は私に語りかけて、その恐怖の深さを憂う。

歯車の食い違った異質の社会に従属出来ない不甲斐を悔い、流れは傾斜を好むことを知りながら、流れに逆らって生命を得ることもあり、法に盲従して法に滅びることもある。

見落とされた骨の弱い者の生きられる社会にこの骨を残す。

### 久保 大八郎 氏

昭和15年1月、歩兵第四十四連隊入隊、ビルマにて終戦を迎える。

平成30年、99歳で逝去。

晩年に記された戦中の出来事の中から長女の小松憲子さんに寄稿していただきました。

※令和3年7月高知県遺族会報掲載